

S+take+it+that節構文の意味と談話機能*

大 竹 芳 夫

0. はじめに

英語には、次のような take it が節要素を従える構文が存在する。

- (1) Thank you for permission to visit Julia – I take it that silence means consent. (J. Webster, Daddy-Long-Legs)

(1)の斜体部を含む文は、「お返事がないということは承諾したものと受け取らせていただきますので」といった意味を表す。本稿では、(1)のような表現を含む構文を S+take+it+that 節構文と呼び、実際の言語資料を観察しながら、その基本的意味と談話機能について様々な角度から検証する。本構文で用いられる take は、小西(1980, 1996)で定義されるように、「(ある情報を) 心で受け取る、理解に取り込む」といった認識作用を表す。この構文は形式的には、(2)のように it を省略することはできないが、補文標識 that は省略することができるという特徴がある。

- (2) I take {it / *Ø} (that) you are enjoying yourselves.

(Quirk et al. 1985)

また、LDCE⁴, OALD⁶といった英英辞典では take it はしばしば assume, guess などパラフレーズされるが、後に確認するように assume, guess とは異なる特性を示す。従来の研究では、本構文は動詞 take が that 節を指す外置あるいは形式目的語 it を従える構文であると分析されるにとどまってきた。その結果、なぜ take が that 節を目的節として直接従えず、it を介して that 節を後接する労力を費やすのかが問われることはなかったように思われる。本稿では、主語の指示対象が that 節内の命題内容を it で指示するのは、その命題内容がすでに念頭に成立していることを積極的に表現するためであると仮定する。また、構文全体の基本的意味は、that 節内の命題がすでに情報として念頭に成立していること

を *it* で積極的にマークした上で、その命題を *take* する、つまり自分の理解に取り込むという過程を相手に伝えることであると考え。あわせて、*S+take+it+that* 節構文が積極的に用いられる場面、及び用いられにくい場面を示し、その語用論的機能を明らかにしながら、存在理由を考察する。

2. 基本的意味

本節では *S+take+it+that* 節構文の基本的な意味を確認する。まず、本構文の特徴のひとつに主節部の格下げ現象を挙げることができる。つまり、本来は主節である要素が文中や文末にコメント節として挿入的に用いられる現象がしばしば確認できる。(3)が示すように、英英辞典では *CIDE* が主節部の格下げ現象を例示している。

- (3) a. You'll be staying the night, I take it.
b. I take it (that) you'll be staying the night. (CIDE)

実際の言語資料を観察すると、本来は主節部であった *S+take+it* が、(4a)のように文中や、(4b)のように文末、(4c)のように文頭の位置に格下げを受けて現れることが確認できる。また、*take it from me* の形式は文内にとどまらず文を超えて独立生起し、(4d)のように先行文や、(4e)のように後続文の命題内容と関係を取り結ぶ例も見受けられる。

- (4) a. This, I take it, is what is meant by “costume drama,” a designation that “Children of the Century,” a film by Diane Kurys opening today in Manhattan, pursues with dogged literal-mindedness. (The New York Times, Sept. 13, 2002)
b. You are Sister Cameron, I take it. (J. Ashe, Sweet Deceiver)
c. I take it, that the earliest standers of mast-heads were the old Egyptians; because, in all my researches, I find none prior to them. (H. Melville, Moby Dick)

- d. It won't work — take it from me. (CALD)
e. Take it from me — it's the best sushi restaurant in town. (LAAD)

こうした主節部の格下げ現象は、話し手が *that* 節の内容を確信をもって断定していることを裏付けている。

次に、本構文に現れる *it* の指示特性について確認しておこう。Kamio and Thomas (1999) は、指示表現 *it* は発話に先立って話し手の知識の蓄積に取り込まれている情報を指示すると分析する。これは *that* が話し手が得たばかりの新情報を指示するのと対照的である。

- (5) That can serve to indicate what is from speaker's point of view novel or newly learned information, whereas it refers to information which has already undergone some degree of integration into the speaker's store of knowledge. (Kamio and Thomas 1999)

次に示す(6)では「ブルックラインでは夜間路上駐車は禁止だ」という話し手 A の発話に対して、話し手 B1 のように *that* でその駐車禁止を受ける場合は、その禁止規則を知らない新参者の発話、一方、話し手 B2 のように *it* で受ける場合にはその禁止規則をすでに知っている住人の発話であるとされる。つまり、*it* は、発話に先立ってすでに話し手の念頭に成立している命題情報を指示する特性があると言える。

- (6) Speaker A: Overnight parking on the street is prohibited in Brookline.
Speaker B1: That's absurd.
Speaker B2: It's absurd. (Kamio and Thomas 1999)

これらを総合すると、本研究対象の S+take+it+that 節構文において、*that* 節内の命題が *it* で表示される理由は(7)のように仮定できる。

- (7) It はある命題が話し手の知識において情報としてすでに確定していることを積極的に合図する。S+take+it+that 節構文は、主語の指示対象が何らかの根拠を抛りどころに、that 節内の命題内容を確定した情報(既定情報)として理解に取り込む過程を表現する。

(7)を換言すれば、本構文の主語の指示対象の念頭にはある命題情報がすでに成立しており、その命題情報を自分の理解に取り込むことを相手に伝えていると考える。自分の念頭に成立している情報を理解に取り込むということは、裏を返せば、発話に先立ってまだ未確定の情報でなければならない。したがって、典型的には主語の指示対象による推論や解釈が提示されることになる。(8)では、that 節内に in his view「彼の考え」、you mean「相手の解釈」が現れて、主語の指示対象の解釈や推論が提示されている。

- (8) a. What did he mean? Were we to take it that, in his view, this odious ban was a kind of revenge?

(<http://www.telegraph.co.uk/opinion>)

- b. Assemblyman Dalton: [...] I take it that you mean these individuals have been transferred within the company to other plants, other jobs. Is that correct?

Ms. Galvanek: That is correct.

(<http://www.njleg.state.nj.us/legislativepub>)

- c. I take it you mean the Accord Coupe. (USA Today, Sept. 27)

ここで注意しなければならないのは、that 節に提示される推論や解釈は、必ず何らかの根拠の存在を前提とすることである。次に示す(9a)では from the smile on your face、つまり「笑顔から判断すると」と相手の外見が推論の根拠になっているし、(9b)では名前、(9c)では発言内容、(9d)では言葉遣い、(9e)では状況変化といった事実が推論や解釈の根拠になっている。(9f)では反対意見が出ないという現状を根拠に、安全保障理事

会の議長が「反対意見がなければ、理事会はこの案に賛成するものとします」と述べている。(9g)では検査結果という客観的データを根拠・起点とすれば、ある情報の既定認定が自動的に成立することが表現されている。興味深いことに、(9h)のように、take it from me that の形で、話し手自身の知識や経験を根拠とすれば、聞き手がある情報を既定として理解するに至るということが表現される場合も観察される。

- (9) a. From the smile on your face I take it that you like that!
b. I take it from your name that you're an Arab-American or at least of Arab origin.
(National Public Radio キャスターの発話, March 11, 2003)
c. But I take it from your words that you are trying to push us into an alliance. (The Guardian, May 27, 2000)
d. [...], "from all this wondrous verbiage I am to take it that you love?" (R. Sabatine, Trampling of the Lilies)
e. Now he has been promoted, are we to take it that he is happy to see less of his family?
(The Sunday Times, June 2, 2002)
f. The President: [...], If I hear no objection, I shall take it that the Council agrees to this request. (United Nations, Security Council 2320th Meeting, Dec. 18, 1981)
g. From the examination of these bombs would you take it that they were bombs that required a fuse to ignite?
(Trial Transcript No. 1. Testimony of George B. Miller, July 24, 1886)
h. "You can take it from me that that's the case," he grandly stated: the self-fulfilling defence against any smell of perjury. (The Guardian, Sept. 22, 1998)

ここで(10)の例を見よう。(10)では take the fact that という形をとり、発話

に先立って命題情報が「事実」としての認定を受けている。具体的には、(10)の *You can't take the fact that I'm your boss!* では「私は君の上司である」ということを事実として相手が理解に取り込むことができない、また *I can't take the fact that anyone's my boss.* では「誰かが私の上司である」ということを事実として自分が理解に取り込むことができないと述べている。

(10) Dr. Mark Greene: *You can't take the fact that I'm your boss!*

Dr. Doug Ross: *That's typically narcissistic of you, Mark. I can't take the fact that anyone's my boss.* (映画 ER (1994)の台詞)

発話に先立って命題が事実認定されているこうした構文とは異なり、*S+take+it+that* 節構文は、話し手がすでに念頭に成立している推論や解釈を示した上で、自分の理解に取り込むという点に特徴がある。

なお、本構文の主節主語位置には、一人称の *I* が多く生ずるが、(11)のように *you* や *she* といった代名詞も現れることができる。

(11) a. *You take it that endangering anyone else would have been fine.* (The Guardian, Sept. 10, 2001)

b. *She takes it that we are sophisticated enough to understand its primacy, and doesn't need to restate it.*

(The Guardian, June 24, 2003)

しかし、話し手以外の人物の理解や認識の過程は直接的には断言しがたいために、(12a-b)のように、間接的な形式 *certainly* 「きっと」や *I think* 「思うに」がしばしば主節に付与される。

(12) a. “*You can certainly take it that the prime minister has devoted a huge amount of his own personal time and energy to what is a very important decision for any government,*” he said. (The Guardian, June 5, 2003)

- b. I think we can take it that Sir John Bond will not be volunteering to sit on any working parties, review panels or other talking shops that the Government might have in mind. (The Times, June 1, 2002)

次に、S+take+it+that 節構文が用いられない文脈や場面、つまり使用条件とでも呼ぶべき特性を観察しよう。

- (13) a. I take it that {today is your birthday / (*)today is Sunday}.
b. I take it that {you'll be staying tonight / *you'll be fine}?
c. Let's {assume / *take it} that today is January 1, for a minute.
d. Please tell me how long HIV in a few drops of blood will take to die? (??*)Let's take it that the blood is not dry.

(<http://www.thebody.com/Forums/AIDS>)

(13a)が示すように、I take it that today is your birthday. 「今日はあなたの誕生日なのですね」は自然であるが、I take it that today is Sunday. 「今日は日曜日なのですね」は不自然である。これは、「今日が相手の誕生日」であることは目の前に大きなケーキやお花があるといった状況や先行文脈を整えれば容易に推論可能な内容であるが、「今日が日曜日」であるかどうかということは、通例は、ある事実を根拠として推論するといった内容ではないからである。ただし、(13a)に、「病院で意識を取り戻した話し手が外から讚美歌や礼拝の声が聞こえてくる」といった特殊な先行文脈を設定するならば、推論過程を経て「今日が日曜日である」ということが既定化を受けられるため、I take it that today is Sunday. は容認可能となる。続く(13b)の I take it that you'll be staying tonight? は、will be -ing で表現されるような未来の確定的な内容を含んでいるため自然な発話である。一方、you'll be fine? 「あなたが元気になる」といった確定が不可能な内容は本構文では表現し得ない。そのため、I take it that you'll be fine? は不自然となる。また、(13c)の

ように「今日が1月1日だとちょっと仮定してみよう」といった事実とは異なる内容を本構文は表現できない。これは、本構文が何らかの事実を根拠として成立する推論を表すからであると考えられる。つまり、S+take+it+that 節構文は、先行文脈や状況のない全く白紙の状態での推論や仮定は表現できないと考えられる。これは *assume* が先行文脈や状況のない白紙の状態での仮定も表現できるのと対称的である。(13d)はインターネットで収集した例であるが、私のインフォーマントたち（アメリカ人2名、イギリス人2名、カナダ人2名）は全員が不自然であるとの判断を示した。この文が不自然であると判断されるのは、*that* 節内の命題「血液が乾燥していないものと理解してください」が、何らかの根拠をもとに成立する命題情報とは理解しがたいからであると思われる。

次に(14)の容認可能性に注目しよう。

(14) I { *want to / *wish to / *hope to } take it that silence means consent.

本構文は *assume*, *guess* とは異なり、*want*, *wish*, *hope* といった主語の指示対象の恣意性を表す願望表現とは共起しがたい。つまり、S+take+it+that 節構文が表現する「理解」とは勝手な意思に基づくものではない。何かの根拠に基づくと、ある命題情報が念頭に成立するので、その命題情報を自分の理解に自動的、必然的に取り込むことを表現することがわかる。また、実際のデータを観察すると *take it that* が必然的な予定や運命を表す *be to* としばしば共起する例が確認できる。先に見た(8a)では *Were we to take it that...?*、(9d-e)でも *I am to take it that*、*are we to take it that* と *be to* が用いられ、既定情報を理解に取り込む過程が、必然的、運命論的なものとして話し手に捉えられていることは明確である。次いで(15)を考えよう。

- (15) a. Why do you { *assume* / ??**take it* } that my phone is out of order?
b. Speaker A: I heard your voice croak. So, ...
Speaker B: So, what do you { *assume* / **take it* }?

(15a)が示すように、S+take+it+that 節構文は why 疑問化を許さない。Why do you take it that my phone is out of order? は、「私の電話が故障中であると推論したうえで、なぜ理解に取り込むのか」という意味になり、相手が既定情報を理解に取り込むのはどうしてかと問うことになる。しかし、(14)で確認したように、本構文は、念頭に成立する命題情報を自分の理解に取り込むのは必然的、自律的な作用であるので、理解に取り込む理由を取り立てて問うことは不自然となると考えられる。また、(15b)が示すように S+take+it+that 節構文の that 節内の命題内容を what で疑問化して、What do you take it? と問うことはできない。これは、疑問の対象になっている that 節の内容がまだ不明であるにもかかわらず、it で表示されて既定化を受けているから不自然であると考えられる。不明な命題内容は、情報として確定することができない。

さて、本構文の統語的特性を論じている研究に Ross (1973) がある。Ross (1973) は、if 条件節内に S+take+it+that 節構文は生起できないと説明する。

(16) *If I take it that you and Miss Pecan are acquainted, I will be happy. (Ross 1973)

しかし、S+take+it+that 節構文は必然的な認定を表現することから、(17a-b)が示すように、前件の認識が定まれば必然的、自動的に後件の認定に至るといった我々の認識の連関を客観的に表現する場合には、if 条件節中にも S+take+it+that 節構文を用いることができると考えられる。(17a)を例にとると、「もし、B の主張が誤りでないものと理解すれば、<that 以下の内容を>ひとまず認めなければならないことになる」という認識の連関を表している。

(17) a. If we take it that B's claim is not evidently false, then we have to grant that although "in the actual world" has wide scope relative to the rest of A's assertion, it is not rigid.

(M. G. Richard (ed.), Blackwell Guide to Metaphysics)

- b. If we take it that the 30-month rule was devised on the basis that the disease virtually always did not show itself until that age, we assume that the animal feed restrictions were in place soundly as from 1 August 1996, [...].

(<http://www.parliament.the-stationery-office.co.uk>)

また、Ross (1973) は、(18)のように S+take+it+that 節構文は進行相をとることができないと説明する。

- (18) {I take it / *I am taking it} that you had sampled those brownies.

(Ross 1973)

しかし、(19a-b)が示すように、ある認識が成立するものと主語の指示対象が決めてかかっている場合には S+take+it+that 節構文は進行相と共起できることが確認できる。

- (19) a. Police interviewer: Well now you're saying it's the first time before you said you couldn't remember, which is it?

Shipman: Well you're taking it that it's a repeat visit, I'm correcting you in saying I can't remember visiting at 3 o'clock, so for me this is the first visit.

(<http://www.guardian.co.uk/shipman>)

- b. Some seem to be taking it that I am saying "leave your church." That is NOT what I am saying NOR is it what the Lord is saying. He is not through with the church, only the religious "system" [...]

(<http://www.jtlmin.com/99ml/99ml28.htm>)

(19a)や(19b)では、相手が、ある認識の成立を決めかかっているが、実はそうではないという含みを話し手がもたせていることが後続文脈からわかる。

3. 談話機能

本節では S+take+it+that 節構文の談話機能について考える。本構文はしばしば平叙疑問化を受けて発話されるという点に特徴がある。

(20) a. “I take it that you don’t care for the sun?” they enquire silkily, [...]. (The Observer, Aug. 5, 2001)

b. “I take it you will be teaching engineering?” I asked. (The Guardian, Sept. 22, 1999)

(20a)は「あなたは日差しを気にしないんですね」、(20b)は「あなたは工学を教えることになるのですね」といった意味を表し、形式的には平叙文の語順であるが文末に疑問符を伴っている。従来の研究では S+take+it+that 節構文の音調は個別に指摘されてきたが、平叙疑問化を受けて文末に疑問符を伴う上昇音調(=(21a))と、疑問符を伴わない下降音調(=(21b))の2種類が存在することがわかる。

(21) a. I take it the guests have had something to eat? (Leech and Svartvik 2002)

take
it
that
b. I want some el
you ed thing
se.

(Bolinger 1977)

平叙疑問化を受けて上昇音調と疑問符を伴う(21a)は、自分の既定認定の理解を提示して、相手の積極的な反応を期待する場合に用いられる。(21b)

のように下降音調を伴う方は相手の積極的な反応を期待しているわけではない。なお、本構文の平叙疑問化は(22)に示すように、主節要素が格下げを受けて文末に生ずる場合にも可能であることが確認できる。

- (22) a. This is a recent change, I take it? (L. Goodman, Gemini Girl)
b. He does still want to marry you, I take it?
(J. Neel, Death of a Partner)

S+take+it+that 節構文がこうした確認機能をしばしば発揮しうる理由は(23)のように考えることができる。

- (23) That 節内の命題内容に聞き手が直接かかわっているため、聞き手の知識と関連づければ命題内容を確実に既定情報として理解に取り込めるとの想定のもとで S+take+it+that 節構文が発話されれば、確認の機能が派生する。

さて、(24)は本構文に関連する受動態の例である。

- (24) It is generally taken that all and only humans are persons, but this is surely false.
(Between the Species 1994)

(24)は It is generally taken that...と「...であるものと一般的に理解されています」といった意味を表す状態受動態である。That 節内の情報が発話に先立って既に広く知られていることを表すこの用例においては、話し手は当該情報を話し手の念頭に成立する情報として既定化する必要がない。そのため、表面に it が現れることもなく、平叙疑問化を受けることもない。

では、念頭に成立する情報を理解に取り込む過程を相手に披瀝することが求められるのはどのような談話であろうか。(25a-b)を考えよう。

- (25) a. Mr. Epstein: No, your Honor.

The Court: And I take it that the pending motions brought on your behalf are withdrawn.

Mr. Roth: That's correct, your Honor.

(U. S. Dist. Court, Southern Dist. of New York, Oct. 20, 2000)

- b. Schieffer: So I take it you're going to ask them both to campaign with you?

Gephardt: I'd love to have them campaign with me, and when I'm the nominee, I'll ask for their help in a lot of different places.

Schieffer: You say — do I take it that you believe that Bill Clinton is an asset to the Democratic Party?

Gephardt: Absolutely. Bill Clinton did a good job as president of this country, economically, domestically and in foreign policy. (CBS, Face the Nation, June 8, 2003)

(25a)は手元の情報に依拠して推認を重ねてゆく裁判での審理や審問で本構文が用いられている例、(25b)は相手の真意や意図を確認しながら情報を確定してゆくインタビューで本構文が用いられている例である。このような、自分の理解を相手に積極的に伝えることで、相手の反応を確かめることが求められる談話で本構文が用いられることがわかる。

最後に、(26)のような *take it from me* を含む構文について考えよう。

- (26) a. [記事の冒頭で] Take it from me, one of the country's greatest experts on general election defeats, Portillo is not the man to lead the Conservative party out of the political wilderness. (The Guardian, June 18, 2001)

- b. When Barry looked puzzled, Robby echoed his mother by giggling, "Don't worry about it, Barry. Just take it from me that you learned something. Have you left Teddy to fight the war alone?" (<http://geraldle.tripod.com/stories/werewolf>)

- c. “I’m telling you, take it from me. You’re in America. If you’re weak, they will eat you up.” (映画 Closer to Home (1995)の台詞)
- d. City people will not know what that means but, take it from me, it’s an awful lot of baskets. (The Observer, June 10, 2001)

これらは *from me* があることから、<話し手である私を根拠とすると、自動的に *that* 節内の命題情報が成立、確定するので、それをそのまま理解に取り込みなさい>といった意味を表現する。*That* 節内の命題内容は、聞き手にとっては容易には知りがたい内容であるが、話し手の知識に基づけば必然的に既定認定することになるものとして情報が提示される。たとえば、政治に精通する記者が読者に新事実を教えたり(=(26a))、母親が子供に教え諭したり(=(26b))、理屈を説いたり(=(26c))、個人的事情を披瀝したり(=(26d))する文脈で用いられる。聞き手にとっては自分が知らないことを既定情報として提示されるため、話し手の優越を感じさせる結果になる場合がある。また、次例では *take it from me* を含む文が *he grandly stated*、つまり「彼はうぬぼれて述べた」と評され、うぬぼれた発言、思い上がった発話として聞き手には受け取られている。

(27)(=(9h)) “You can take it from me that that’s the case,” he grandly stated: the self-fulfilling defence against any smell of perjury. (The Guardian, Sept. 22, 1998)

話し手自身を根拠として成り立つ命題が相手の理解に取り込まれることになることを伝えるこの構文は、しばしば相手の無知や知識欠如を表面化することになり尊大な印象を与えることもある。

4. まとめ

本研究では、収集した言語資料やインフォーマントを活用することで、*S+take+it+that* 節構文の形式とその意味の関係を様々な角度から分析した。*S+take+it+that* 節構文は、主語の指示対象が *that* 節内の命題を *it* で表示

して自分の念頭にすでに成立している既定情報として明確に位置づけ、そのうえで自分の理解に取り込む心的過程を表現する構文であることを確認した。あわせて、本構文が積極的に用いられる場面、及び用いられにくい場面を明らかにしながら、その語用論的機能についても考察した。S+take+it+that 節構文は、主語の指示対象が自分の理解の過程を相手に積極的に伝えることによって、相手の反応を確かめながら事の実情や真相を認定することが求められる談話でその機能を発揮することを検証した。

* 本稿は英語語法文法学会第 11 回大会(2003 年 10 月 25 日、於：関西外国語大学)での口頭発表した原稿「S+take+it+that 節構文の意味と談話機能」に加筆・修正したものである。発表に際して貴重なコメントをいただいた方々に心から感謝の意を表したい。また、本稿をまとめるにあたり有益なご助言をいただいた査読委員の方々にも記して感謝したい。なお、本研究は平成 14-16 年度文部科学省科学研究費補助金若手研究(B) 課題番号 14710329「日英語の名詞化補文の普遍性と個別性に関する記述的・理論的研究」(研究代表者：大竹芳夫)の研究成果の一部である。

参考文献

- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. Longman. (中右実訳(1981)『意味と形』こびあん書房)
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
- Kamio, A. and M. Thomas. 1999. "Some referential properties of English it and that." in Kamio, A. and K. Takami eds., *Function and Structure: In Honor of Susumu Kuno*. 289-315. John Benjamins.
- 小西友七編. 1980. 『英語基本動詞辞典』 研究社出版.
- 小西友七. 1996. 『英語のしくみがわかる基本動詞 24』 研究社出版.
- Leech, G. and J. Svartvik. 2002. *A Communicative Grammar of English*. 3rd edition. Longman.
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』 大修館書店.

- Otake, Y. (大竹芳夫) 2002. "Semantics and Functions of the It is that-Construction and the Japanese No da-Construction." In Ionin, T., H. Ko and A. Nevins eds., MIT Working Papers in Linguistics. Vol. 43, 143-157.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. A Comprehensive Grammar of the English Language. Longman.
- Ross, J. R. 1973. "Slifting." In Gross, M., M. Halle and M.-P. Shutzenberger eds., The Formal Analysis of Natural Languages: Proceedings of Fifth International Conference. 133-169.
- CALD: Cambridge Advanced Learner's Dictionary. 2003. Cambridge University Press.
- CIDE: Cambridge International Dictionary of English. 1995. Cambridge University Press.
- LAAD: Longman Advanced American Dictionary. 2000. Longman.
- LDCD⁴: Longman Dictionary of Contemporary English. 4th edition. 2003. Longman.
- OALD⁶: Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English. 6th edition. 2000. Oxford University Press.

(信州大学助教授)

otakeyo@shinshu-u.ac.jp

